慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	小林端五著 工場法と労働運動
Sub Title	
Author	小松,隆二
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1966
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.59, No.10 (1966. 10) ,p.1157(133)- 1158(134)
JaLC DOI	10.14991/001.19661001-0134
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19661001-0134

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって 保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

介

猪谷善一著

四四 洋経済

かない。 研究を摂取し、それを内容に盛込むべく努力 局のところ 掛声 だけに 終るのではあるまい 界の諸成果をふまえて立つというものの、結 の著者にしてなお十分でなかったという事実 置を占めるかについては読者の賢察に待つほ 多いが、本書がそうしたなかでどれほどの位 発展は著しく、 の著者にしてこれが克服できなかった。著者 が、前途の困難さを知らされた感がある。学 この種概説書の執筆を考えているわけである に思いをはせざるを得なかった。私自身今後 したというものの、そうした作業が長老ほど きと信ずる。最近わが国における学問研究の にあたり、この点は十分配慮されてしかるべ か。いわばそうした不安であるが、長老ほど く学界から遠ざかっておられた。本書を読む 著者は経済史の長老であるが、 私はといえば、著者自身、同学者の 西洋経済史と題する著作も数 このしばら

> 思うが、現実に物の用に立たないとすれば、 ある。 むずかしい。本書を手にした時、私はそうしる努力を学界の共通財産にまで高めることは ているとは思えない。その限り平常の営々たか。一般に個別研究をふまえて通史が書かれ 個別の業績の打出し方こそ問題ではあるまい た淋しさを深く感じたのであった。 した流れを理解させることに向けらるべきと の能力にかかわる以上に一考を要する問題で 体個別研究というものはすべて一貫

経済、 章村落共同体、第五章封建社会、第六章都市 シュモラー説、第六節ウェルナー・ゾンバルト説、第四 章経済階段説、 第一節経済階段説の意味、第二節フ 経済史学の発展、第二章経済史の研究、 あった。以下に私は目次を並べるわけだが、 者はつねにこれを念頭に置くべきであり、 容に先立つ以前にその評価を決着する鍵とな ト説、第四節カール・ピュヒアー説、第五節グスタフ・ もっぱらそうした観点からであった。 れを果すべく何が盛られるかは重要な問題で る。経済史で何を理解したらいいのか。担当 ードリッヒ・リスト説、第三節ブルー・ヒルデブラン 構成だが、一般に概説書においてこれは内 第七章絶対主義、 第一節都市の成立、第二節ドイツ・ハンザの盛 第八章フランス革命 第一章 第三 そ

六五〇円) の発達、 協会・昭和四一年二月刊・A5・二〇七頁・ 著者の積極的な姿勢とも受取られると思うの 第一節ブルジョア革命と啓蒙哲学、第二節ブルジョア革 は一人筆者の 身勝手であろうか。 れらをも西洋経済史の範囲に投入すべきか。 境涯を反映しているものとして興味深い。 これは学界のそとに身を置いた著者の多彩な を越えたと思われる部分もあるが、かえって 内容は多岐にわたる。西洋経済史という首題第六節世界貿易における構造革命。知られる如く、 易、第五節第二次世界大戦以降における世界貿易の発展、 第三節第一次世界大戦と貿易、第四節世界経済恐慌と貿 おける競争の液化、第十一章世界貿易の歴史的発 自動車工業、第五節西ドイツ自動車工業、第六節世界に 動車工業、第三節イギリス自動車工業、第四節フランス ギリス産業革命と日本産業革命、第十章自動車工業 カ合衆国の産業革命、第七節朝鮮の産業革命、第八節イ 工業、第四節紡績革命、第五節工場制度、第六節アメリ 第一節産業革命の研究、第二節機械の特色、第三節田園 第六節フランス革命と明治維新、第九章産業革命、 の要望、第四節一七八九年、第五節フランス革命の成果、 命と社会経済的背景、第三節陳情書に現われた社会階級 第一節古代貿易、第二節十九世紀における躍進、 第一節自動車の世界生産、第二節アメリカ自 | 渡 辺 (税務経理 國廣— そ

大H 石ク ラ 泰门 ボルル

『確率論入門』

ある。 ば、他の入門書と変ったものではないが、問題 示されている。この自次の項目だけをみれ 推定と検定の問題、分散分析、品質管理等が 明される。第3部では統計的応用が示され ポアソン、x*(カイ)自乗、 t 、 F 分布等が説 がとりあつかわれる。正規分布を中心に二項、 では現在あつかわれる各種の分布とその性質 論の歴史と、確率計算があつかわれ、第2部 3部、応用、 **基礎理論、第2部、確率変数と確率分布、第** いさえすれば十分である」と考えられるので ましいのであるが、根底事項としては本書に 統計学の知識はそれこそ多ければ多いほど好 にち統計学の応用はますます広がってきてお もられている範囲の知識を確実に身につけて いるが、 統計学の入門書も現在かなり多く出版さ どのような学問の勉強に携わるにしても 本書は三部からなっており、第1部、 訳者のはしがきにあるように、「こん 今回クラー と分れている。第1部では確率 メルの確率論が翻訳さ

> 社・A5・三一八頁・一六〇〇円) えてくれるものと 思われる。(東洋経済新報 るいは中級をねらう人々にも充分満足をあたエルの数理統計学入門に近く、その程度、あ は先に翻訳され、現在絶版になっているホー その程度では不満という人々にとって、本書 使わずに、ウィルクスは若干使っているが、 表的なものであるが、ホーエルは全然数式を 意がなされている。現在、入門書として、ウ つかむことができる。本書もその点十分の用 ħ されても内容を理解しにくいが、実例を示さ 専門家でない者にとってはただ数学的説明を 問題とともに解答が用意されている。数学の 米の書物は説明が十分になされ、豊富な練習 エル(浅井晃、村上正康訳)初等統計学が代 イルクス(林周二訳)初等統計解析、とホー 内容の説明が初学者にとって難解であり、 頁数の関係もあるが、数式的説明に追われて はその内容であろう。 練習問題を解くことによってその内容を 練習問題も数少ないのに対して、 日本の書物の多くが、 ŧ

小林端五著

『工場法と労働運動』

にいたが、本書はそのような空白をうめるべについては、これまで十分な研究がなされず る。 く、その成立過程の解明を試み たものであ 近代的社会政策立法の第一歩である工場

全面的に取りあげているものではない。 (二頁) がおかれており、 工場法 そのものを 動の実態と意義を明らかにすることに力点」 立の社会経済的背景となった労働者階級の運 工場法成立そのものよりも、 しかし、著者もいう通り、 むしろ工場法成 本書は「わが国

化せしめたのは、一八九七年以降展開された五頁)、 政策主体及び 資本にその成立を必然 て る飴として、 題』にたいする措置、鞭(治警法)にたいす で工場法が本格的関心事となりだしたのは、 るところに特色があるといわれるが、わが国一般的に工場法は産業資本確立期に成立す 一八九六年以降の ことである。 著 者 二面的効果を持つことになるが」 工場法は「一方において『新しい社会問 他方においで軍国の強兵策とし によれ 二七

(二一五七)

紹 介

刊

の抜殼に等しい」「不具化」された もの 奇妙な 取引のもとに」(二七九頁) すすめら たにすぎないと説明する。 れ、しかも労働組合の組織的運動が欠如した 「労働者保護」よりも「工場主保護」の 感さ ところに成立した結果、その内容・性格は「蟬 工場法が「政策主体と産業資本家との 宮国強兵策の一環としてもくろまれ の抬頭であるという。そ

不可欠の根拠となるというのである。このよ るという労働者運動に関心をむけさせること うな観点が著者に 工場法の 究 明 にあたって って、「労働者運動」こそ、その実現のための 体の自発的産物ではない」(一一頁)のであ 級の闘争の産物であり、資本家階級や政策主 根底に横たわっていることはい うまで もな い。氏によれば「社会政策立法こそ労働者階 このような理解には、著者の社会政策論が 立法そのものより、その成立を必然化す 本書のような構成をとらせたものと

会の成立(一八九七年)以前の時期は労働運 (一四九頁)という 立場から、 労働組合期成 労働運動=近代的労働運動は考えられない」 その 労働運動については、「労働組合なき

> 運動も社会主義運動もすべて工場法制定に結 びつける叙述方法を展開するわけである。 九七年以降の運動を中心に叙述するが、 も単に運動そのものを追うだけでなく、 い社会問題」と いう理解をなし、本書でも いう性格をもつにいたる一八

視したい」といいつつ、本書ではそのような 法成立の抽象的論理が具体的分析で十分展開 分離して叙述するという著者の姿勢自体に疑 場法の成立過程と労働者階級の抵抗の相関的 点が十分明らかにされていないように思われ 考えるところから「政策主体の権力構成を重 る。 問を抱かざるをえない。そこから前述の工場 把握が十分でないし、そのような相互関係を の階級的意図が 反映した 譲歩」(一二頁)と たいする譲歩ではなく、それを常に政策主体 されずに終ることになっているように思われ しかしながら、著者も断ってはいるが、 また氏は「社会政策立法を単なる抵抗に

「支配的理論」という 評価などにも 問題があ の使用法、また岸本氏の社会政策論が学界の リズム、無政府主義的直接行動論という用語 カリストとする規定やアナキズム、サンジカ 個別的問題でも、 幸徳秋水を革命的サンジ

> 場法に対し、その成立の社会経済的背景を究 明しようとした労作であることにはかわりは 年一二月刊・A5・三五五頁・一二〇〇円) ものといってよいであろう。(青木書店・四○ 本書はこれまで深い研究がなされなかった工 るように思われる。 しかし、以上のような疑問が残るとは 今後の研究に手がかりを与えてくれる

それ 労働 I.

-小松 隆二-

中村勝己君学位授与報告

番 号 乙第一七六号

学位の種類 経済学博士

授与の年月日 昭和四一年一〇月五日

学位論文題名 『アメリカ資本主義の経済史的考察』

内容の 要旨

「アメリカ資本主義の経済史的考察」論文要旨

村 2

究成果を紹介して、アメリカ資本主義成立期の担い手が、イギリス 系のピューリタン的「中産的生産者層」であることを明らかにし、 義の発展の担い手であり、禁欲的諸教派こそそのエートスの培養基 業家」・「中流、殊にそのうちにあってまたそのうちから、向上せん に立つ「経済的巨人」ではなく、「市民的中流社会」・「中流市民的企 次いで「宗教社会学」的研究も、モルガンのような「善悪の彼岸」 とするものである。まず「産業社会学」や「企業者史」の最近の研 であったと指摘していることを紹介した。 とする階層」すなわち興隆しつつある「産業的中産層」こそ近代主 本論文はアメリカ資本主義の構造的特質を比較史的に解明しよう

学位授与報告

割はその内部に前期性を色濃く遺していたが、同じく後進国たるド 貫制大工場を建設した。この後進資本主義国に固有の商業資本の役 世紀初頭にはマニュファクチュアから初期工場に発展 しつ つ あっ た。他方このような生産者型の農村工業の発展に対応して、ボスト 手工業者が急速に蓄積を重ね、経営を拡大して独立戦争期から一九 工業の海外市場であった。 しかるに中部、 とくに北部では、「タウ ばまでには南部さえも自己の市場にくみ込むようになる。南北戦争 手工業を掃滅し、次いで西部を国内市場として把握し、一九世紀半 す。こうして、生産者型綿業はまず、ニュー・イングランド農村の がては蒸気機関を備え、商人資本型綿業を圧倒するようになる。商 農村工業は一八一〇~二〇年代の苦闘を経て、ギルモア力織機、 ンなどの仲継大商業資本がイギリスから力織機を導入し、一挙に一 つ富裕な農民層が広汎に創出された。この農民層のうちに混在した ン・システム」という土地制度がいち早く採用されたため、自由か こには大衆需要と結びつく資本主義的工業は発達し得ず、イギリス ランテーション」という大規模な奴隷経営が多く見られる故に、そ 本主義発展との内的関連をあきらかにしようとした。南部では「プ はこうした北部産業資本の要求を示すのである。 人型綿業も一九世紀半ばにはその内部構成を改めて行く 傾 向 を 示 イツや日本の場合とは異なって、構造規定的役割を果し得なかった。 カを地域的に南・中・北部に分け、

産者的性格を解明せんとするものである。 このように、本論文はアメリカ資本主義ないし市民社会の勤労生

三 五 (二一五九)